

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：84509

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H00593

研究課題名（和文）漢晋変革の考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Study of Han Jin Transformation

研究代表者

岡村 秀典（OKAMURA, Hidenori）

公益財団法人黒川古文化研究所・研究室・所長

研究者番号：20183246

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日中両国における文献史学と考古学の議論をふまえ、都城制・墓制・輿服制に焦点を当て、歴史考古学の視座から漢晋変革を考えてみた。すなわち、都城は曹操の修築した業城と魏明帝の修造した洛陽城において、単一の宮城、都城全体の中軸線、条坊制が出現したこと、墓制では魏晋期に薄葬化が進んだこと、ステータスシンボルであった車馬が漢末に牛車に取って代わったこと、魏晋期に進賢冠よりも武冠が重んじられるようになったことから、古代官僚制から中世貴族制への転換を多角的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

考古学からみた漢晋間における都城制・墓制・輿服制の変化は、古代／中世の時代区分をめぐる文献史学の議論に裨益するところが多い。また、ICP・鉛同位体比分析によって、王莽が原料の採掘から製造までをコントロールした銅鏡、後漢後期の四川における広漢派と九子派の神獸鏡、制作年と制作地を記した古蜀青銅器の化学的性質を明らかにし、仏教文化の東伝にともなって響銅や黄銅などの新しい銅合金が出現するプロセスを蛍光X線分析によって検討した。こうした文理融合の研究方法を開拓した学術的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：Considering the discussions in Japan and China in the fields of textual historiography and archaeology, I decided to focus on capital cities, burial systems, and rules for carriages and dress and consider the Han-Jin transition from the perspective of historical archaeology. (1) The city Ye of the Cao Wei possessed a clear-cut central axis, a single palace was placed at the northern end of the central axis, and a residential area was in the residential wards within the city. (2) It is recorded in historical writings that rulers of the Wei-Jin period gave instructions for simple funerals, and the process whereby there occurred a major shift from the lavish funerals of the “Han system” to the simple funerals of the “Jin system” has been traced archaeologically. (3) In the final years of the Han scholar-officials abandoned horse-drawn carriages, which had been a symbol of power, and switched to the ox-drawn carriage used by commoners.

研究分野：考古学

キーワード：歴史考古学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

戦後日本の中国史學では、古代から中世への時代区分をめぐって、魏晉南北朝・隋唐・五代の時代(220~960)を中世とする京都學派の説と宋・元・明・清(の鴉片戦争まで)の時代(960~1840)を中世とする歴史學研究會派の説とに二分され、はげしい論争がくりひろげられた。しかし、論争の当事者たちが相次いで逝去したこともあり、今世紀にはかつてほど議論の盛り上がり認められなくなった。

一方、中國では今世紀になって曹操高陵や西晉皇帝陵をはじめとする曹魏・西晉の大墓が相次いで調査されたことにより、墓葬を主とした「漢制」から「晉制」への轉換についての議論が活発になっている。近年ではまた、都城の大規模な調査が進展したことにより、曹操の修築した鄴城や魏明帝の修造した洛陽城の晝期性に着目し、それが魏晉南北朝・隋唐時代の主流をなしたという「中世都城」論が提起されている。

### 2. 研究の目的

本研究は、文献史学から提唱された漢晋変革について、主に考古学の方法を用いて下部構造と上部構造の両面から検討し、古代から中世への轉換を跡づけようとするものである。

(1) 下部構造の分析では、銘文をもつ漢三国兩晉時代の考古資料をもとに生産体制を復元し、その歴史的变化を明らかにする。

(2) 上部構造の分析では、都城制・墓制・輿服制という制度を検討する。まず厚葬の「漢制」から薄葬の「晉制」への変化を克明に跡づける。また、イデオロギーの面では洛陽城における太極殿の出現、民衆の支配という点では鄴城における条坊制の出現が重要であろう。輿服制では車馬から牛車への車制の変化を跡づける。以上、なぜ魏晉の貴族は薄葬を重んじ、整齊な条坊制をもつ都城を設計し、あえて鈍足の牛車に乗ったのか、古代から中世への変化について、考古資料と文献史料の両面から検討するのが目的である。

### 3. 研究の方法

(1) 銘文から制作年代や制作地のわかる青銅器、とくに漢鏡の考古学的研究と鉛同位体比分析をはじめとする化学分析をもとに、原料の流通、制作から流通と使用までを検討し、その歴史的变化を明らかにする。

(2) 都城制・墓制・輿服制などの諸制度のうち、『続漢書』と『晋書』の輿服志などの文献史料、墓室壁画・陶俑・車馬具などの考古資料をもとに、漢から魏晉における車制と騎馬の変革を検討し、漢末の士大夫がステイタスシンボルの車馬を棄てて遅鈍な牛車に乗り換え、戦争用の馬具から装飾馬具が生成するプロセスと理由を考える。

### 4. 研究成果

(1) 王莽は貨幣改革を断行し、後10年には六筦の令を設けて鉱山資源の国家的独占をはかった。王莽のコントロールした銅原料の化学的性質を明らかにするため、王莽の「新」王朝において「丹陽」郡の銅官が選別した「善銅」を用いて「尚方」の「巧工」が制作した「御鏡」、すなわち王莽宮廷鏡であることを銘記した大阪府紫金山古墳出土の方格規矩四神鏡(以下「紫金山鏡」)について鉛同位体比分析を実施した。その結果、既知の「尚方御」鏡・「王氏作(昭)」鏡や同時期の直径27cmをこえる大型内行花紋鏡四葉座 式は、図1の破線で示した領域にまとまることから、同一の原料を用いて洛陽ないしは長安の官営工房で制作された可能性が高いことが明らかになった。また、広形銅矛や近畿式・三遠式銅鐸などの弥生後期青銅器は領域A内のごく狭い領域a( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}=0.8763\pm 0.0008$ )に画一化し、華北の同一鉱山に由来する「規格品の原料」と推測されているが、王莽のコントロールした宮廷鏡よりも狭い範囲に集中していることから、弥生後期を通じて流入しつづけたのではなく、ごく短期間のうちにまとめてもたらされたと考えられるが、とくに後5年の王莽の上奏文に「(王)太后統を乗ること数年、恩沢洋溢し、和氣四塞す。絶域の殊俗、義を慕はざるなし。越裳氏重訳して白雉を献じ、黄支三万里より生犀を貢じ、東夷王大海を渡りて国珍を奉じ...」(『漢書』王莽伝上)という「東夷王」は日本列島の倭人であり、ちょうど紫金山鏡や岐阜県美濃観音寺山古墳から出土した「王氏昭鏡」「新家」銘の方格規矩四神鏡は王莽の撫恤政策によって下賜された宮廷鏡であることから、領域a原料も同じころに王莽から贈与されたものと考えた〔岡村 2021「舶載された王莽宮廷鏡 大阪府紫金山古墳出土の方格規矩四神鏡の鉛同位体比分析から」『史林』104-5〕。

(2) 四川盆地は鉱産資源の豊富なところで、早くから独特の青銅器文化が栄えていた。紀元前2千年紀後半に継起した三星堆文化と金沙文化では、同時代に併行する黄河中流域の殷・西周王朝とは異質な造形の青銅器が生みだされた。青銅器原料の産地を推定する鉛同位体比分析法によると、三星堆と殷墟の青銅器は領域SのMVT(Mississippi Valley Type)異常鉛を共通して用いていたが、西周以降の中原青銅器は領域A・Bの普通鉛、金沙文化の青銅器は領域S・領域S-B間(異常鉛)・領域A・B、前1千年紀の巴蜀文化では領域A・Bの原料を主に用いていたことが判明している。つまり、中国青銅器の原料は前2千年紀から前1千年紀にかけて地域的な偏差をと

もないながら、おおむね異常鉛から普通鉛へと段階的に変化したのである。鉾山で採集された方鉛鉱の分析をもとに、領域 S や領域 S-B 間の異常鉛は中国西南地方に産出する原料と推定されているが、巴蜀文化以降の青銅器にはほとんど利用されていないと考えられていた。

ところが、後漢時代の四川盆地における神獸鏡の工人グループに広漢派と九子派があり、広漢派は中央の朝廷から発注を受けて神獸鏡を制作していたのに対して、九子派は地元の民間市場に神獸鏡を流通させていた。それらの鉛同位体比をみると、広漢派の鏡はすべて後漢鏡タイプの領域 B だが、九子派の神獸鏡 3 面は領域 S-B 間に位置していること（図 2）、中国西南地方の後漢墓出土とみられる東京国立博物館蔵の銅製揺銭樹も領域 S-B 間に属していることから、在地的な青銅器の原料には金沙文化以来の異常鉛が用いられていたことが推測された〔岡村 2022「画紋帯神獸鏡の東伝 型式と鉛同位体比からみた九子派の動態」『東方学報』京都 97〕。

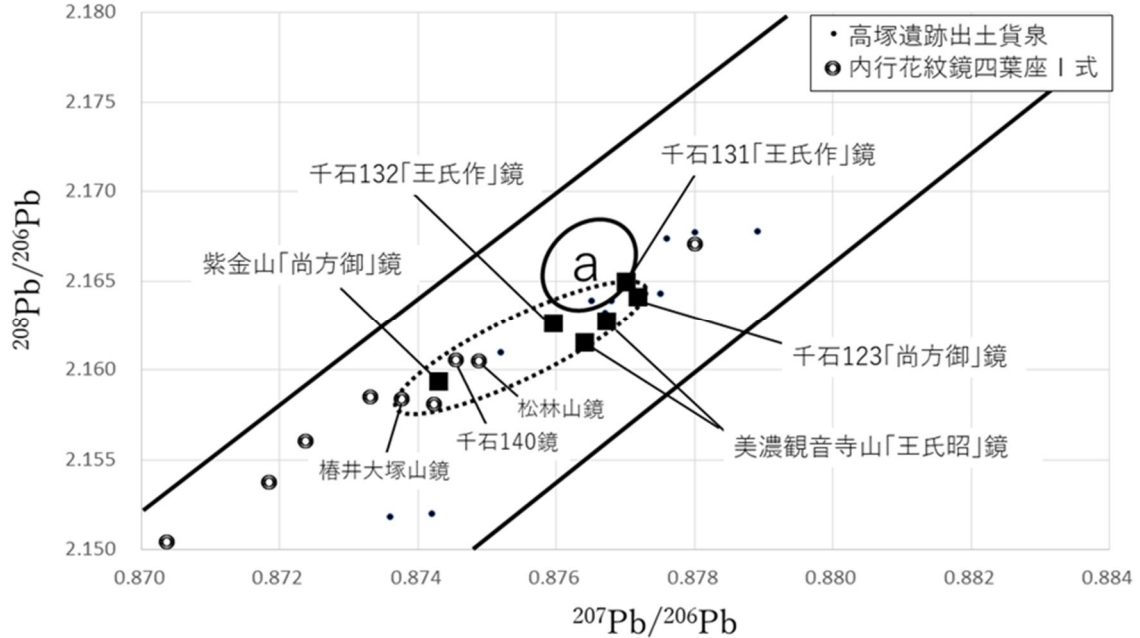


図1 新莽期の鏡と貨泉の鉛同位体比 A 式図（領域 a 付近）〔岡村 2021：図 4 を改変〕

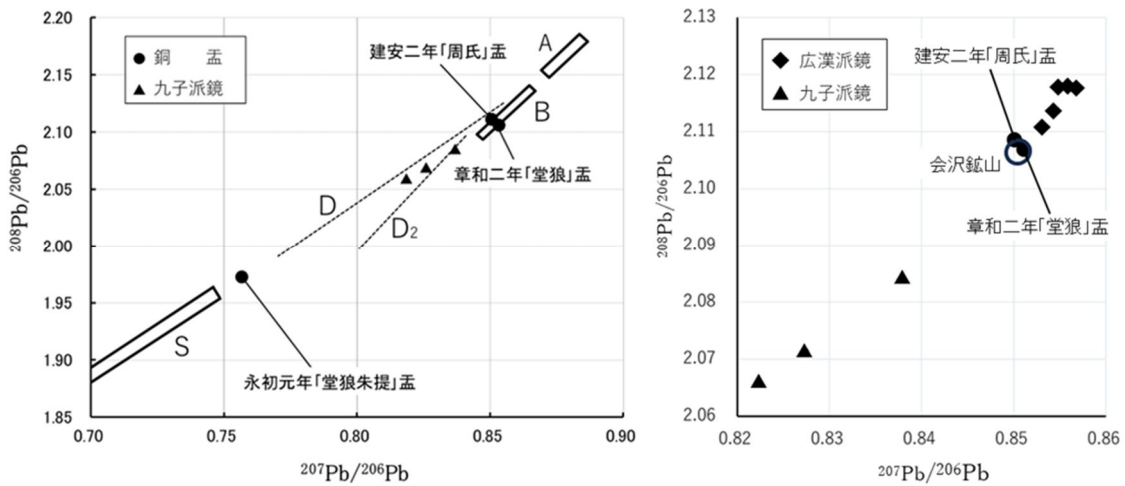


図2 鉛同位体比 A 式図（右図は左図の右上拡大図）

(3) 黒川古文化研究所には紀年や制作地を銘文に記した後漢時代の銅盃 4 点が収蔵され、世界的にもめずらしいコレクションになっている。それが 章和二年（88）「堂狼造作」盃、永元三年（91）「堂狼造」盃、永初元年（107）「堂狼朱提造」盃、建安二年（197）「八月造作 / 周氏」盃である。「堂狼」と「朱提」は漢代の犍為郡に所属する県名であり、制作地を記したものと考えられる。「朱提」はいまの雲南省昭通市、「堂狼（堂琅）」は同会沢県のあたりに治所が比定され、近くには鉾山が多く分布している。そこで 章和二年「堂狼造作」盃について ICP 分析をおこなった結果、銅 80.55%、錫 11.74%、鉛 7.43% であり、それ以外の元素はすべて 0.10% 以下であった。同時代の銅鏡の場合、微量元素として砒素 (As)・銀 (Ag)・アンチモン (Sb) を不純物として含むことが多く、広漢派の千石コレクション 153 環状乳三神三獸鏡・162 獸首鏡・169 龍紋鈕八鳳鏡では、砒素 0.34~0.51%、銀 0.11~0.13%、アンチモン 0.34~0.77%、九子派の同 155 対置式神獸鏡・156 同向式神獸鏡では砒素 0.17~0.31%、銀 0.05~0.06%、アンチモン 0.16~0.30% を含むから、これは純度の高い銅錫鉛三元系青銅器である。ただし、蛍光 X

線分析では、永初元年「堂狼朱提造」孟と 建安二年「周氏」孟においてそれぞれ砒素 2.7%と 1.7%が測定されている。また、鉛同位体比分析の結果は、章和二年「堂狼造」孟と 建安二年「周氏」孟が後漢鏡タイプの領域 B、永初元年「堂狼朱提造」孟が領域 S-B 間に位置している(図 2 左)。今回分析した 章和二年「堂狼造」孟と 建安二年「周氏」孟の鉛同位体比はちょうど雲南省会沢鉱山の領域内、永初元年「堂狼朱提造」孟は同金沙廠鉱山の領域内に位置している。会沢鉱山はまさに堂琅(堂狼)県治の推定地であり、金沙廠鉱山は朱提県治の北に位置していることから、それぞれ地元に産出する原料を用いて銅孟を鑄造した可能性が高い。今後、このように銘文などから制作地のわかる青銅器を重点的に分析するとともに、鉱山に近いところで発見された精錬遺跡や青銅器鑄造遺跡について考古学と化学との共同研究を進めることにより、いっそう精度の高い議論に高めてゆく必要がある(岡村・渡邊緩子・隅英彦 2024「黒川古文化研究所蔵銅孟の化学分析報告」『古文化研究』23)。

(4) 単著『東アジア古代の車社会史』(臨川書店、2021年)を出版した。殷後期に西から単輦の車馬がもたらされ、先秦時代にはもっぱら戦車として用いられたこと、官僚制の確立した秦漢帝国では、戦争に用いられていた車馬は騎馬に取って代わられたものの、舗装道路網が整備されたことにより馬 1 頭立ての双輦車が広範に用いられ、官僚たちのステータスシンボルになったこと、しかし漢末の動乱によって道路のメンテナンスが滞り、馬車の走行に支障が出てきたこと、質素倹約を演出する清流派士大夫は華美な車馬を棄てて牛車に乗り換え、魏晋期には貴族の乗用する牛車が創作され、隋唐時代に継承されたこと、さらに 9 世紀には日本の平安貴族に受容されたことを論じた。

(5) 2022 年 5 月 21 日の第 66 回国際東方学会議(ICES)シンポジウム「漢晋変革の考古学的研究」をオンラインで主宰した。都城制については張学鋒(南京大学)「東アジアにおける“中世的都城”」と朱岩石(中国社会科学院考古研究所)「漢晋間における新しい宮城プランの確立と成熟」、墓制について向井佑介(本研究分担者)「漢晋の墓制変革 近年発見の曹魏大型墓をめぐる諸問題」と森下章司(大手前大学)「曹操高陵・洛陽西朱村曹魏墓出土石牌の性格」、輿服制について岡村(本研究代表者)「漢晋間における車制の変容」と小林聡(埼玉大学)「漢晋間における服制の展開 朝服制度の伝播を中心に」の発表があった。これに対して文献史学から佐川英治(東京大学)と考古学から市元壘(東京国立博物館)よりコメントをいただいた。この成果を東方学会の英文紀要『ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture』No.126(2024、序文+論文 4 本、計 134 頁)に特集した。その主な内容は漢晋間における都城制・墓制・車制・服制の変化とその背景に関する論考である。都城は曹操の修築した業城と魏明帝の修造した洛陽城において、単一の宮城、都城全体の中軸線、条坊制が出現したこと、墓制では魏晋期に薄葬化が進んだこと、ステータスシンボルであった車馬が漢末に牛車に取って代わったこと、魏晋期に進賢冠よりも武冠が重んじられるようになったことから、古代官僚制から中世貴族制への転換を多角的に明らかにした。

(6) 晋の車制について『晋書』輿服志は車馬の「安車」「輶車」に加えて「雲母車」「阜輪車」「油幢車」「通幢車」という牛車の 4 車種をあげ、「雲母車」は「臣下は乗るを得ず、以て王公に賜うのみ」、「阜輪車」は「諸王・三公の勳徳ある者に特に之を加う」、油幢車は「王公・大臣の勳徳ある者に特に之を給う」、通幢車は「諸王・三公はみな之に乗る」という。それらの牛車は漢代の「安車駟馬」と同じように皇帝から王公貴族に對して特別に賞賜された高級車であった。輿服志はまた、漢末の靈帝・獻帝以來、皇帝から下位の貴族にいたるまで牛車に乗るようになったと記し、牛車が晋の車制において重んじられたことは早くから注意されていた(尚秉和 1969 秋田成明譯『中國社會風俗史』平凡社東洋文庫、原書 1938 年刊)。

219 年、曹操は 78 歳という高齢の楊彪に牛車や鞍馬などを贈った。楊彪は四世太尉といわれた後漢の名士で、獻帝の側近として曹操に迎えられたが、曹操の後継者争いのなかで楊彪の子の脩を曹操が殺してしまったからである。そのとき曹操が送った書簡「曹公與楊太尉書」には、慰問のため「錦裘二領、八節銀角桃杖一枝、青氈床褥三具、官絹五百匹、錢六十萬、畫輪四望通幢七香車一乘、青犢牛二頭、八百里驂騮馬一匹、赤戎金裝鞍轡十副、鈴駝一具、驅使二人」を贈り届けたことが記されている(安徽亳縣《曹操集》譯注小組 1979『曹操集譯注』中華書局)。その「四望通幢七香車(四方が遠望できる通幢の七香車)」は牛車であり、それを牽く牝の青牛、裝飾的な馬具を付けた名馬、車夫・馬丁を併せて贈っている。「通幢」とは漢末の『釋名』釋車に「幢、憲なり。熱をふせぐ所以なり」とあり、日除けの幕。『晋書』輿服志にみえる「通幢車」が漢末に出現していたことがわかる。東晋永和十三年(357)の北朝鮮黄海南道安岳 3 号墓には、武冠をかぶり塵尾を手にもつ「使持節、都督諸軍事、平東將軍、護撫夷校尉、樂浪相、昌黎・玄菟・帶方太守、都郷侯」の「冬壽」が日除け幕を懸けた牛車に坐り、儀仗隊列を率いている壁畫があらわされていた。「冬壽」は前燕から高句麗に亡命した貴族である。曹操が楊彪に贈った「四望通幢車」もこのような倚子形の牛車であったのだろう。

また、上述の西朱村大墓からは「雲母犢車一乘、蓐坐・牛人自副(牛の牽く雲母車の模型 1 臺、座蒲団と牽牛俑が附屬する)」や「馬五匹、鞍・勒自副(馬 5 體、鞍と勒の模型が附屬する)」と

刻まれた石牌が出土し、牛車と鞍馬の模型を組み合わせで副葬されたことがわかる。『晉書』輿服志は牛車の筆頭に「雲母車」をあげ、「臣下は乗るを得ず、以て王公に賜うのみ」というから、それは西朱村大墓の被葬者と推定される明帝のむすめ平原懿公主の身分にふさわしい牛車であること、そのような新しい車制が曹魏明帝期に萌芽していたことがうかがえる。

なぜ、漢末から魏晉の貴族は軽快な車馬を棄てて遅鈍な牛車に乗り換えたのか。劉増貴（1993「漢隋間的車駕制度」『中央研究院歷史語言研究所集刊』63-2）は、漢末の清流派士大夫が權力の象徴であった車馬を棄てて庶民の乗用する牛車に乗り換えたと論じ、山田勝芳（1988「馬車と牛車 中國古代の官人と中世の貴族」『綜合研究 中世の文化』角川書店）は、その背景に貴族制の成立と古代から中世への社會變化を読み取った。かつて川勝義雄（1982「東晉貴族制の確立過程」『六朝貴族制社會の研究』岩波書店）が主張した中世貴族制論を別の角度から検証しようとする研究である。今世紀になると、畫像石や壁畫などの繪畫資料、陶俑や模型明器などの造形資料がますます増加し、筆者（岡村 2021『東アジア古代の車社會史』臨川書店）は次のように論じた。前漢時代より官僚制度が整うなかで車馬の種類や行列編成に関わる車制が生まれるが、後漢末期になると、「清」を重んじる士大夫の風潮、戦亂による軍馬の需要増、道路補修の停滞、安定した騎馬を可能にする鞍や鐙の改良など、さまざまな要因により車馬は衰退し、官吏は騎馬に、貴族や高貴な女性は牛車に乗るようになり、魏晉期には貴族制にもとづく新しい車制が策定されたと考えられる。いわば、官僚制の車馬から貴族制の牛車への轉換である。

漢末における士大夫の意識變化を如實に示すのが山東省嘉祥縣の「武梁」石祠である（図3）。ここには敦煌長史の武斑（145年歿）、吳郡丞の武開明（148年歿）、従事の武梁（151年歿）、執金吾丞の武榮（167年ごろ歿）という武氏一族の墓地があり、「武梁」石碑には「（梁は）韓詩』を治め、未成年にして講義し、河圖洛書の類や諸子・傳記を廣く研修した。……州や郡は（梁を）請召したが、（梁は）病と稱して官に就くことを辭退し、粗末な家に安住し、朝に道の眞理を論じることを楽しみ、道理を以て人を教え、川に臨みて倦まず、世に雷同するを恥じ、權門におもねることはなかった」と刻まれている。また「武梁」石祠の畫像石には「處士」の榜題をもつ牛車の前に人事擔當の「縣功曹」が車馬から下りて贈物の布帛を差し出す場面があらわされている。「處士」とは、儒家的學問と德行を兼ね備え、家に在って官に就かないが、郷黨の稱贊をえている武梁のような者であり、後漢の地方社會に急増した（鎌田重雄 1962「後漢の處士」『秦漢政治制度の研究』日本學術振興會）。ここでは州郡の請召を辭退する「處士」武梁の清廉潔白な生活表現が半円筒形の幌を架けた粗末な牛車であったと考えられる。桓帝の辟召を辭退した京兆霸陵の韓康や州郡の請召を拒否した漢陽郡西縣の趙壹も粗末な「柴車」（＝牛車）に乗っていたという（『後漢書』韓康傳・文苑列傳下）。それは魏晉の爲政者が質素儉約を重んじ、薄葬を遺命したことと通底する（OKAMURA Hidenori 2024, *The Transformation of Rules for Wheeled Vehicles in the Han-Chin Period*, *ACTA ASIATICA*, No.126, pp.73-92）。



図3 山東省嘉祥縣「武梁」石祠東壁の畫像石拓本〔Chavannes, Édouard, 1913 *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*, Tome 1, Paris, Ernest Leroux, no.76〕

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 岡村秀典・渡邊緩子・隅英彦	4. 巻 23
2. 論文標題 黒川古文化研究所蔵銅盃の化学分析報告	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古文化研究	6. 最初と最後の頁 165-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典	4. 巻 23
2. 論文標題 中国西南地方における後漢時代の青銅器生産	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古文化研究	6. 最初と最後の頁 157-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典	4. 巻 23
2. 論文標題 倭奴国王冊封以前の鏡と青銅器原料	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 古文化研究	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 OKAMURA Hidenori	4. 巻 126
2. 論文標題 The Transformation of Rules for Wheeled Vehicles in the Han-Chin Period	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture	6. 最初と最後の頁 73-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MUKAI Yusuke	4. 巻 126
2. 論文標題 Changes in the Burial System from the Han to Chin Periods: With a Focus on Large Tombs of the Ts'ao Wei Discovered in Recent Years	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture	6. 最初と最後の頁 47-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典	4. 巻 165
2. 論文標題 古代中国・人はどのように生きたか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 109-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典	4. 巻 105-5
2. 論文標題 中国で発見された景初三年鏡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 69-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典	4. 巻 97
2. 論文標題 画紋帯神獸鏡の東伝 型式と鉛同位体比からみた九子派の動態	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東方学報	6. 最初と最後の頁 449-480
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 OKAMURA Hidenori	4. 巻 66
2. 論文標題 The Transformation of Rules for Chariots and Carriages in the Han-Chin Period	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES	6. 最初と最後の頁 91-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 OKAMURA Hidenori	4. 巻 66
2. 論文標題 Archaeological Research on the Han-Chin Transition	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES	6. 最初と最後の頁 128-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典	4. 巻 104
2. 論文標題 舶載された王莽宮廷鏡 大阪府紫金山古墳出土方格規矩四神鏡の鉛同位体比分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 625-646
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡村秀典・渡邊緩子・隅英彦・大平理紗・種定淳介	4. 巻 96
2. 論文標題 千石コレクション漢六朝青銅器の化学分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東方学報	6. 最初と最後の頁 409-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 岡村秀典
2. 発表標題 漢晋間における車制の変容
3. 学会等名 国際東方学会議（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 向井佑介
2. 発表標題 漢晋の墓制変革 近年発見の曹魏大型墓をめぐる諸問題
3. 学会等名 国際東方学会議（国際学会）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岡村秀典	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大象出版社	5. 総ページ数 249
3. 書名 夏王朝 中国文明的原像	

1. 著者名 諫早直人、向井佑介	4. 発行年 2023年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 312
3. 書名 馬・車馬・騎馬の考古学	

1. 著者名 岡村 秀典	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 468
3. 書名 東アジア古代の車社会史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	向井 佑介  (MUKAI YUSUKE)  (50452298)	京都大学・人文科学研究所・准教授    (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------